

スポーツ選手の性格の二面性について

津田 忠雄

A Study on the “two-sidedness of the athlete’s personality”

Tadao Tsuda

Abstract

This research focused on apparent existence of the antipodal personality in the sport events, which is utterly different from the athlete’s usual self-recognized personality. The author considered antipodal personality of the athlete as “two-sidedness of the athlete’s personality”. An awareness survey and “TSPS (Two-Sided Personality Test)” were performed and the results were analyzed.

“Two-sidedness of the athlete’s personality” was recognized among majority athletes. It became obvious that “two-sidedness of the athlete’s personality” was antipodal, however, co-existing, complementing and influencing each other.

In other words, the “two-sidedness of the athlete’s personality” was antipodal but continuous while they were contradicted. The “two-sidedness of the athlete’s personality” was found to be co-existed and self-controlled. Moreover, the research found that many athletes naturally accepted the “two-sided personality” without any concerns.

The research also indicated that the athlete’s personality was grasped more dynamic and vivid through referring to the athlete’s “two-sided personality”

1. 問題

ある競技者は、普段の生活や練習において、口数も少なく、おとなし目立つこともないが、試合になると人が違ったのではないかと思うほど、自分を攻撃的に表現する。また、ある競技者の日常の言動は、自分勝手でおちゃらけが多く、理解に苦しむことも多いが、練習や試合になると一変し、ルールを重んじ、他者にも遵守することを強要し、まじめに、また、真剣に取り組む姿勢をみることができる。

このことは何もスポーツをする競技者に限ることでもなく、日常の体育・スポーツ実技実習の中でも、多々実感することができる。そこには、普段の講義や何気ない言葉のやり取りの中では、感じ、見ることもない自分を赤裸々に表現する学生の姿があり、戸惑いながらも驚愕と安堵をもって見守ることができる。

これらの多くの言動は、普段の言動とは対極的を為すものであり、気がかりになり話しかけると、多くの受講生は、「スポーツをすると自分がでるんです」とか、「スポーツをしている自分の姿がほんとうの自分です」、あるいは「先生はほんとうの私を知らない」「スポーツをしているときも、していないときも私は私です」などと語りかけてくる。

一方、私たちが交わす日常生活の何気ない会話の中にも、「ゴルフを一緒にするとその人が性格が一番よく分かる」、「あの人は、車を運転すると人が変わる」、「スキーの滑りに、本来の性格がでるね」等等、普段の接触だけでは分からないその人の性格や人となりやスポーツ活動の中で見いだすことができる。もちろんこの場合も、日常の行動パターンからは、大きく外れた対極的な行動パターンを見いだすことが多い。

このような何気はない日常の言動、スポーツ場面での言動、そして語られる多くの言葉を要約すると、「スポーツの中で自分をだすことができる(できない)」、「普段の自分と競技をやっている自分は違う」、「競技のなかでは、すぐく攻撃的・情熱的になれる」、あるいは「スポーツしていると

もう一人の私を感じることができる」といったような言葉になる。

言い換えれば、普段それほど意識することのない、あるいは表出することのない対極的な自分自身の性格をくスポーツをする>、<競技をする>中で明確に意識できることできる。端的に言うならば、スポーツにかかわることによって、<私>がいわゆる「もう一人の自分と出会う」といったことかも知れない。もちろんここでいう「もう一人の自分」とは、表出されるもう一人の自分の性格を意味する。

そして「もう一人の自分」とは、普段、意識することのできる自分に対して対極的な性格だと考えられる自分である。しかしながら、興味深いことに、ほとんどのスポーツ選手は、それぞれの場面での自分の性格の表出に対して、違和感をもつことはほとんどない。それぞれの場面ですべての自分をうまく自分自身の中に取り込みつつ、「それも自分である」という感覚をもっている。

このようにスポーツは、競技という世界(場)の中で、選手がもつ性格のもうひとつの側面をあらわに表出させる「場」でもある。そして、もう一人の自分の性格を明確に意識することのできる「場」でもあると考えられる。

ところでスポーツ選手に関する性格研究は、「スポーツマン的性格」に象徴されるスポーツ選手の性格特性、またスポーツが性格に与える影響、スポーツ種目での性格特性の相違、スポーツ適性としての性格特性などが論議されてきた。つまり、このような論議の背景には、ある人の性格は、時間の経過をとめないながら、状況や場面の変化を経ても同じ行動パターンが見られるものであり、ある人の内部にある行動の因果的影響を与えている実体であるという認識である。いわゆる、「性格の一貫性 (consistency of personality)」や「実在素朴論」に基づく論議がある。

しかし、スポーツをすることによって「もう一人の自分に出会う」といった心的現実に関しては語られることがなかった。つまり、実践的、体験的な視点から、スポーツ選手の「性格」をよりダイナミックに捉え、論議されることはほとんどな

かったと言える。

例えば、多くのスポーツ選手の性格特性に関する研究において、外向的であるけれども、内向的でもあるスポーツ選手という論議は存在しない。存在するのは、あくまで外向的な選手は内向的ではない、あるいは内向的な選手は外向的ではない、という論理の展開である。しかし、現実には、スポーツの場の状況によって、その顕在化のあり方を見ると、外向的でも内向的でもあるスポーツ選手は存在する。主観的ではあるが、スポーツ選手は対極的な性格をコントロールしつつ、顕在化し、ダイナミックに競技をし、自分を確かめながら生きていくと考えられる。

そこで本研究は、スポーツ選手の競技場における対極的な性格の表出を「性格の二面性」といった視座から論議する。スポーツ選手が、普段、自覚し得る性格と競技場面で顕在化される対極的な性格をどのように感じ、意識しているのか、あるいはこのような「性格の二面性」を自覚することは、行動にどのようなバランスとダイナミズムを与え、コントロールされ、統合されるのかを討議する。

もちろん、「スポーツ選手の性格の二面性」について言及することは、スポーツ選手の性格が二面的であると提案することではなく、普段、見過ごし、また、あえて意識することのない「もう一人の自分」を注視することによってスポーツ選手の性格のあり方をよりダイナミックに捉えようとするのが目的である。

II. 方法

1. 調査方法

調査は、「性格の二面性」を測定するために開発された桑原(1983)のTSPS(Two-Sided Personality Scale)とスポーツ選手の性格に関するアンケート調査を行った。

1) 対象

- ① R大学スポーツサイエンスコース、スポーツ心理学、受講生(以下スポーツ選手と略)。
- ② 体育会系のクラブに入っているものがおよそ

30%であり、他のほとんどの学生は同好会、もしくは今はやっていないけれど、中学校、高等学校で運動クラブに所属し活躍していたものが多い。ただし、中学、高等学校、大学において、運動クラブ、同好会に属していない学生4名はこの集計から除外した。

2) TSPS について

① TSPSは、桑原(1983)によって開発されたものであり、『「人格の二面性」を「質問紙法によって測定可能な一従って意識することのできる一人格の側面』と定義し、客観的、量的処理可能な質問紙としている。この質問紙について河合隼雄は「従来のものとは異なり、各人は矛盾の共存を許容する反応をすることが可能なのである」(桑原, 1991a)と述べている。

② 質問紙は、単極の7段階評定尺度を対にして組み合わせたものを用いている。(図1)

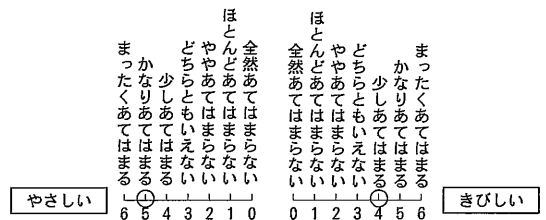


図1 測定形式

③ 項目の作成は、以下の点について考慮されている。

- (a) 人の性格を形容するのに適当であること。
- (b) どちらの語も望ましい意味をもつ語で、かつ望ましさの程度がほぼ等しいこと。
- (c) 意味の重なりがないこと。
- (d) 対にした語は対立概念として妥当であること。

ところで、TSPSは、30項目すべてが望ましい意味をもつ語(Positive語、以下P語と略)で構成されており、その後、性格の片面しか取りだせない、あるいは自己を望ましくみせようとする構えが混入するおそれがあると考えられ、望ま

しくない意味をもつ語 (Negative 語、以下N語と略) を追加し、詳細な検討が加えられ、TSPS-IIとして開発されている (桑原 1986)。

また、桑原 (1986) は、個人のパーソナリティ特徴を以下の心理テストとの比較検討を行い、スコア別に検討をおこなっている。

- ①矢田部-ギルフォード性格検査
- ②MMPI
- ③CAS……不安尺度
- ④MAT…… (Measurement of Ambiguity Tolerance) あいまいさに対する耐性を測定するものであり、小林 (1980) の MAT-50 を使用
- ⑤CPI・Fx尺度…… (The California psychological inventory) の中の、flexibility を測定する尺度 15 項目
- ⑥WJ……rigidity - flexibility を測定するもの

尚、他にも、内山 (1985) が

- ⑦同一性次元尺度
- ⑧独断主義尺度
との比較分析、
- 若林 (1981、1986) は、自ら作成した気質尺度
- ⑨VPI (VERAC-Personality Inventory)
との比較を行っている。

本研究では、“P”の方が、容易にスポーツ選手の「二面性」を抽出することができると考え、また、スポーツ選手の心理的混乱を最小限に避けることができると考えたために、公表されている TSPS を用いた。項目は 30 項目ある。

3) 対象人数

TSPS : 85 名
アンケート調査 : 91 名
TSPS とアンケート調査の人数が違うのは、一週間ずらして実施したためであり、TSPS の実施者 85 名は、すべてアンケート調査を実施したスポーツ選手である。

4) 実施時期 : 平成 11 年 1 1 月

III. 結果と若干の考察

1. 二面性テスト (TSPS) によるアプローチ

結果の集計は、以下の要領でおこなった。

1) TSPS のスコアリング

TSPS のスコアは、

- ①和のスコア (以下 S₊)
- ②差のスコア (以下 S₋)
 - (a) 差の計算は対ごとにマイナスにならないように大きい方から小さい方を引く。
 - (b) 共存性項目 (一人の性格に共存しやすい対) は差の計算に取り入れない。
 - (c) 共存性項目は以下の通りである。
 - ・ 实际的 : 理論的
 - ・ 自立的 : 協調的
 - ・ 茶目っ気のある : 大人っぽい
 - ・ 執着する : 臨機応変の
 - ・ 話し上手 : 聞き上手

(d) S₊ と S₋ の組み合わせにより、A、B、C、D の 4 タイプに分類される (表 1 参照)。ただし、A タイプは、その傾向が見られる人を <a> とし、ややその傾向がある人を <aa> とした。他のタイプも同様に処理をした。

すなわち、A (a+aa) タイプ、B (b+bb) タイプ、C (c+cc) タイプ、D (d+dd) タイプと類型化した。

尚、A タイプ、B タイプは二面性が高く、C タイプ、D タイプは二面性が低い傾向がある。

表 1. TSPS のタイプわけ

S ₊ \ S ₋	0 ~ 194 (195 ~ 204)	(205 ~ 213) 214 ~ 360
0 ~ 36 (37 ~ 42)	A a + aa	B b + bb
(43 ~ 48) 49 ~ 150	D d + dd	C c + cc

それぞれのタイプについて桑原 (1998) は、次のように述べている。

- ・ A (a+aa) タイプ
a : S₊[0~194] & S₋[0~36]

aa : S₊[195~204] & S₋[37~42]

やや「二面的」な性格。しかし、決して分裂症だとか二重性格だということではない。むしろ「バランスのとれた」性格といえる。時には「あいまいな」性格と見られることもある。「私はこうだ!」と自分を主張しない「やさしさ」と、主張できない「弱さ」の両方があるといえる。

・ B (b+bb)タイプ

b : S₊[214~360] & S₋[0~36]

bb : S₊[205~213] & S₋[37~42]

典型的な「二面的」タイプ。「二面性」を有することは、むしろ矛盾を許容できるだけの「ゆとり」をもった人といえる。常識的なものの捉え方にとらわれず、自由に人やものを見る事ができる。活動的だがひとりになると深くものを考えるとか、思い切ったことをするわりにどこか冷静といった、矛盾する二つの特性を持ちながらその間でバランスをとっているタイプである。

・ C (c+cc)タイプ

c : S₊[0~194] & S₋[49~150]

cc : S₊[195~204] & S₋[43~48]

ややこしい場面や不慣れな場面に出会っても自分のペースを崩すことなく慎重に対応していける人である。やたら落ち込んだり深く物事を考えすぎてしまうこともない。

・ D (d+dd)タイプ

d : S₊[214~360] & S₋[49~150]

dd : S₊[205~213] & S₋[43~48]

自分の性格を「こうだ!」と言い切れるような強さをもっている。自分自身への肯定度も高く、そのことが「活動性」の原動力になっている。

図2-1は、TSPSのタイプ別比率を[A]、[B]、[C]、[D]別に示したものである。典型的な二面的な性格が想定されるBタイプが38.8%でもっとも高い比率を示し、次にやや二面的性格が想定されるAタイプが34.1%であった。自分の性格をよく把握しているというDタイプは14.1%であり、慎重で自分のペースを崩さないCタイプは12.9%であった。この結果、スポーツ選手には、二面性が顕著に認められるBタイプ、比較的二面性がうかがえるAタイプの出現率が高いこと

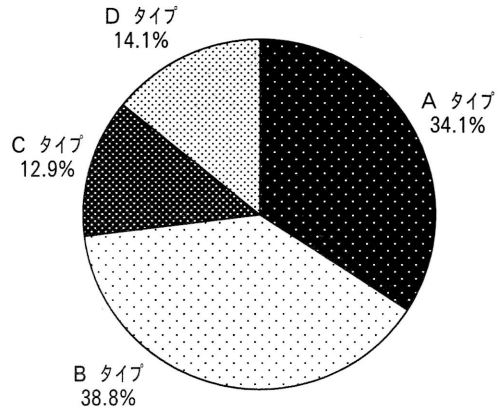


図2-1. TSPSタイプ別

が認められた。A、Bタイプを合計すると82.9%と高い比率で出現しており、5人のうち4人以上が自分の性格に対して、「性格の二面性」を有しているあるいは認知していることが理解できる。

このことが、スポーツ選手は二重人格であるとか、人格が分裂しているといったことを示唆するものではない。桑原(1986a)が、このような高得点群の特徴について、「この群は矛盾する特性を共有させているからといって不安定でも、同一性に混乱をきたしているわけではなく、むしろ安定しており、さらに、思考や感性において柔軟さもようしているようである」と指摘するように、むしろこの高得点群の高い出現率は、スポーツ選手の性格特性のあり方を特徴づけるものであり、意義深い対極的な性格の共有を示唆するものである。

また、内山(1985)がアイデンティティとの関連において「アイデンティティのまとまりが高ければ一面的であり、低ければ二面的である、といった相関関係は必ずしもない」と述べるように、「二面性」を感じることを意識することが、自己のアイデンティティを脅かすものではないと思われる。

いわゆる、スポーツ選手の性格を一面的に捉えることよりも、二面的という性格が、人としての活動に、より柔軟的で積極的な安定したところのダイナミズムを与えていることが考えられる。

また、今回使用したTSPSは、桑原(1986a)

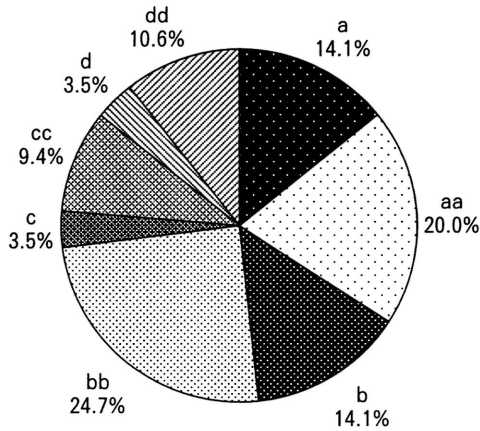


図2-2. TSPSタイプ別

が「かくれた自分」とでもいうべき性格を表出しよう。「かくれた自分」は多く無意識的であるが、TSPSがすべて望ましい意味をもつ語によって構成されているために表出が容易になったとも考えられる」と述べるように、望ましい意味をもつ語によって構成されていたために意識していない自分が比較的表出されやすかったと考えられる。そして、多くのスポーツ選手が、「このテストは、尺度が対になっているために、自分の二面性に注目しやすく、自分の中にある性格の分からない部分もなんとなくだし易い」と述べていることも興味深い。

ところで、対語のもう一つの利点は、質問の言葉自体に理解を助けるということである。桑原も「対にすることは、ある項目の意味を対語によって逆規定させるという側面ももっている」と述べているが、スポーツ選手にすれば難しい言葉、分かりにくい言葉を対語によってその言葉の意味を探れる、想像できるということがしばしば見受けられたことである。

2. スポーツ選手の性格の二面性に関するアンケート調査

この調査は、スポーツ選手の意識を調査する目的で実施されたものであり、今回はスポーツ選手の性格の二面性に関する項目を抜粋し、検討比較する。各項目は、スポーツをしている時と普段の生活での性格の違いはあるのか無いのかなどについて、実際にどのような意識をもっているかを質

問項目に加えたものである。対象者は、R大学スポーツサイエンスコース、スポーツ心理学受講生91名である。

1) 設問:「あなたは普段の生活の中で自分(性格)がスポーツすることで変わると感じますか」

この設問に対して「思う」と回答したスポーツ選手は、68人(74.7%)であり、「思わない」と回答したスポーツ選手は10人(11.0%)であった。70%以上のスポーツ選手がスポーツをすることによって普段の自分とスポーツ活動の中での自分に対する意識の変化、相違を認めている。(図3-1)

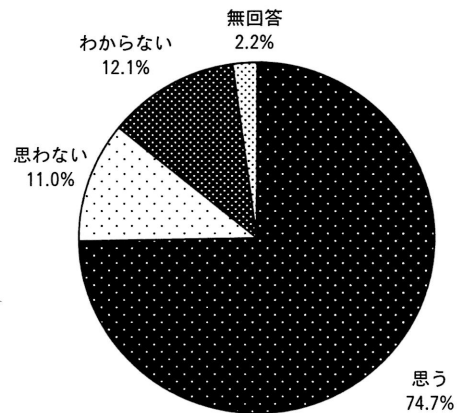


図3-1. スポーツすることによって性格は変わるか

また、「思う」と回答したスポーツ選手68人に対して、競技スポーツを行うときに顕著に表出されるいくつかの性格特性に関して設問をした。設定した性格特性は、①積極性②協調性③大胆さ④決断力⑤リーダーシップ⑥責任感⑦冷静さ⑧統率力⑨その他である。

それぞれの特性に関して、『あてはまる』(よくあてはまる+少しあてはまる)と回答した比率は、すべて60%以上であった。具体的な出現比率は、「積極性」(95.6%)が最も高く、ほとんどのスポーツ選手がスポーツ活動の中で積極的な自分、性格を明確に意識していると思われた。次に「決断力」(85.3%)、「協調性」(85.3%)が80%以上であり、「大胆さ」(79.4%)、「責任感」(69.1%)、

「冷静さ」(69.1%)、「統率力」(64.7%)、「リーダーシップ」(63.2%)であった。(図3-2)

同時に求めた自由記述でも、「スポーツをすると普段の自分より生き生きとする」、「攻撃的になれる」「積極的に自分をだすことができる」といった記述が見られた。

このことから、普段とは違う自分、あるいは性格の変化を、スポーツ場面で少なからず多くのスポーツ選手がその変化を意識しているということはたいへん興味深い。このことが、スポーツ選手の性格の二面性を顕著に現しているということではなく、違った自分を意識している、あるいは意識できるということであり、スポーツ活動、競技の状況、場面が普段の自分とは違う自分自身を肯定的、積極的に受け入れ、顕現化し得る環境でもあるということも示唆された。

また、競技スポーツ活動の中で顕著に表出されられると思われる性格特性をかなり高い比率で認めていることは、スポーツ選手の性格の二面性を論議する上でかなり興味深い示唆を与えるものである。

2) 設問2:「あなたはスポーツをしている時と普段の生活の自分(性格)と意識的に分けていますか。それとも無意識のうちに行っていますか」

この設問に対して、もっとも高率であったのが、「無意識的である」と回答した44人(48.4%)であった。次に「分からない」と回答した18人(19.8%)、「分かれていない」と回答した17人(18.7%)であった。「意識的に分けている」と回答したスポーツ選手は11人(12.1%)であった。(図4)

「無意識的である」という言葉はたいへん幅広く捉えられるが、50%近くのスポーツ選手が「無意識的」と回答していることは興味深く、戸惑いもなくもう一人の自分が素直に表出されたと考えられる。

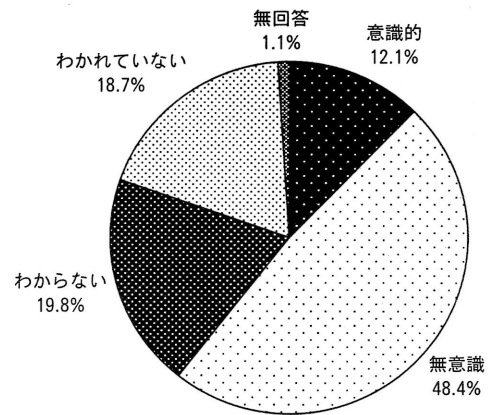


図4. 性格を意識的に分けているか

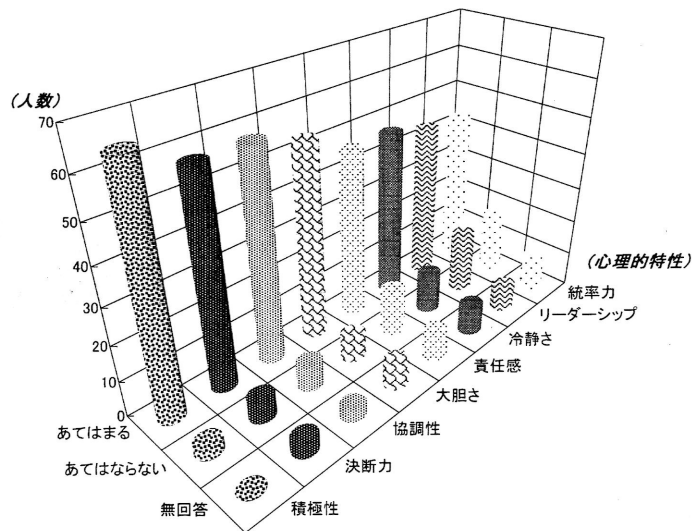


図3-2. スポーツすることで感じられる心理的特性

3) 設問3:「あなたはスポーツをしている自分(性格)と普段の生活の中での自分(性格)は、どちらがほんとうの自分(性格)だと思いますか」

この設問に対しては、50人(54.9%)が「どちらも一緒」と回答している。次に「普段の生活の中の自分がほんとうの自分」と回答しているスポーツ選手が15人(16.5%)、「スポーツしている時の自分がほんとうの自分」と回答したスポーツ選手が14人(15.4%)であった。(図5)

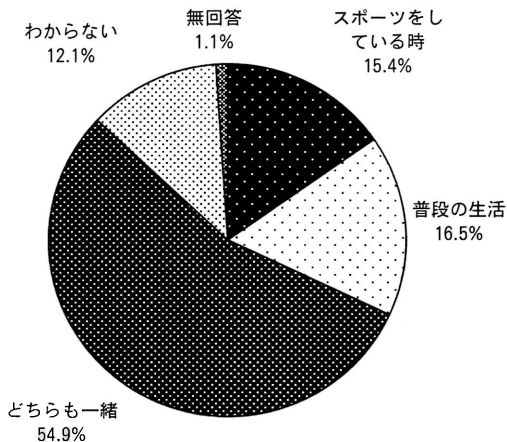


図5. ほんとうの自分を感じるのはどちらか

「どちらも一緒」であるという認識をしているスポーツ選手がもっとも高い比率を示したことは自己に矛盾を感じる事がなく、二面的な自分を率直に受け容れていると考えられる。

また、「どちらも一緒」、「普段の生活」、「スポーツしているとき」と回答した79人中65人(82.3%)が【設問1】の「スポーツすることによって性格は変わるか」という質問に対して「思う」と回答している。

このことは、スポーツが多くの選手に対して、何らかのこころのダイナミズムを生じさせていることを示唆するものである。

4) 設問4:「あなた自身は、まだ気づいていない性格が自分の中にあると考えますか」

この設問について、気づいていない性格が「ある」と回答したスポーツ選手が50人(54.9%)、

「分からない」と回答したスポーツ選手が27人(29.7%)であった。また、「ない」と回答したスポーツ選手も12人(13.2%)であった。(図6)

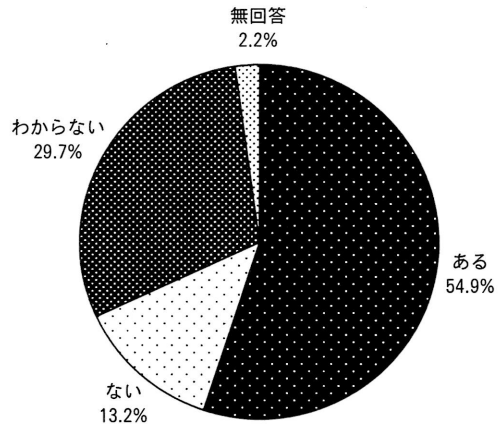


図6. まだ、自分の中に気づかない性格があるか

5) 設問5:「“ある”と回答した人におたずねします。あなたはスポーツをすることによってあなた自身や周りの人が気づいていない性格を見ることができますか」

この設問は、気づいていない性格が「ある」と回答した50人のスポーツ選手に対して、求めたものである。50人中、28人(54.9%)のスポーツ選手が「一部だけ見えてくる」と回答し、12人(23.5%)のスポーツ選手が「見えてくる」と回答している(図7)。

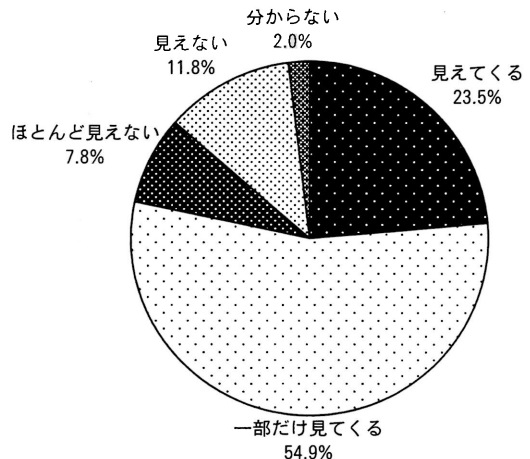


図7. スポーツすることによってその性格はみえてくるのか

このことから、スポーツをすることによって、多くのスポーツ選手は自分が気づかない性格、もしくは自分自身について、普段あまり意識することのできない「もう一人の自分」を気づきさせてくれることが示唆される。

V. 論議

1) 対極的な性格特性の連続性

スポーツ選手の「性格の二面性」にふれることは、精神病理学的に述べられる「二重人格」や「二重身」について論議することではない。桑原(1986a)が性格の二面性を「性格内に存在する対極的な側面」と呼んでいるように、それはあくまで私たちの性格がもつ対極的な側面であり、それは互いに分離されたものではなく、常に連続性をもちつつ、また、同時に存在することを明確に意識することができるのである。

一方、精神病理学で論議される「二重人格」は、二つの人格の間に連続性がなく、その時々に出表される言葉や行動は、同時に存在することなく、極めて分離的でかつ一面的である。

本研究によって、スポーツ選手の多くが、スポーツ場面での「もう一人の自分」を十二分に意識していることが確認された。桑原の開発したTSPSにおいては、スポーツ選手には、二面性が顕著に認められるBタイプ、比較的二面性がうかがえるAタイプの出現率が高いことが認められた。A、Bタイプを合計すると82.9%とたいへん高い比率で出現しており、5人のうち4人以上が自分の性格に対して、「性格の二面性」を有し、認知していることが理解できる。

また、アンケート調査において、「あなたは普段の生活の中で自分(性格)がスポーツすることによって変わると思いますか」という設問に対して「思う」と回答したスポーツ選手は、74.7%であり、70%以上のスポーツ選手がスポーツをすることによって普段の自分とスポーツ活動の中での自分に対する意識の変化、相違を認めていることは興味深いものがある。

このように二つの調査から、多くのスポーツ選手の性格の二面性を見て取れることができ、矛盾

する性格特性の共在を認めることができる。そしてもっとも興味深いことは、この二つの調査によって、スポーツ選手の性格の二面性は、対極的でありながらも、そこには連続性があり、対極的な性格の表出についても、何ら不安をもつことなく、「それも自分である」という認識をもっていることである。このことは、「もう一人の自分」を自然な形で受け容れていることでもあり、視点を変えれば、ある程度コントロールされた統合性ある性格をうかがうことができる。

つまり、前述した内山(1985)がアイデンティティとの関連において「アイデンティティのまともが高ければ一面的であり、低ければ二面的である、といった相関関係は必ずしもない」と指摘したように、「二面性」を感じることを意識することが、自己のアイデンティティを脅かすものではなく、多様な自分を受け容れることも自己のアイデンティティ形成に大きな役割を果たすことが示唆される。

2) 私の中の「一の多」

ところで、「私」をひとつの性格に規定するには、あまりにも複雑である。そして、多様な存在でもある。スポーツ選手に「自分の性格を書きだして下さい」という課題を与えると「個性を生かす。協調的。用心深い。頑固。自分の役割は熱心に果たす。落ち着いた場、音楽を好む。みんなが嫌がるのが好き。柔軟的。社交的な場で人になじめない。場になじめない。マイナス思考がある。恥ずかしがり屋。鈍感。怒るのが下手・・・>とさまざま性格特性を書く。そして、そのスポーツ選手をよく知る友達はくにぎやか。社交的。やることはやる。気遣いをしてくれる。細かい。しっかりしている。人を信用しやすい。怒りを出せない。優柔不断。理解できないところもある等々・・・>と書き添える。さらに、「どんなときにその性格を強く意識するのか」という問いを加えると「家族といるとき、友達と何かをするとき、勉強をしているとき、スポーツをしているとき・・・」とその時々の中での自分をイメージすることができる。性格は自らの中に、その状況の中で顕

現化する。私たちは、さまざまな自分、あるいは相反する二つの自分が共存していることを認めつつ、互いが自分の性格について語りながら、揺れ動く。

ティレル (Tyrrell, 1947) は「人格とは、ほとんど言詮を絶する“一の中の多”である」と述べる。(桑原、1991a)

しかし、そのこと自体、自分自身のところや身体を揺れ動かすものの、「異なるもの」「分かれているもの」として受け取るのではなく、妙にそのこと自体を受け入れている「私」の存在を見つめる。そしてこのように自覚することのできる「私」は、その揺れのなかで、“一の中の多”あるいは対極する性格の二面性を受け容れる。

二人は語り合う。二人の語り中に「私はいったいどこから来てどこへいくのだろう」と素朴な疑問が舞い降りたかのように、こころは揺れる。

このように「私」を見つめるとき、意識する「私」は一つでないことを了解する。また、「私の性格」を思い浮かべるとき、その時々置かれた状況の中での「私」をイメージし、それぞれの性格を受け容れるものと考えられる。

3) 性格の一貫性論争

もちろん、このような論議の展開は、性格の一貫性 (consistency of personality) という動かしがたい前提と矛盾することになる。ここで言う「性格の一貫性」は、経時的安定性 (temporal stability) に基づく行動パターンの状況を越えた通状況的一貫性 (cross-situational consistency) のことである。この性格の一貫性は、行動の原因論的説明や予測に用いる「素朴实在論」と結びつく。

私たちは、他者や自分の行動パターンに通状況的一貫性を認知している。つまり、ある人の性格を把握することができれば、性格関連行動を原因論的に理解することができ、さまざまな状況におけるその人の行動を予測することが可能であると考える。しかしながら、行動に現れる性格が状況に依存した経時的安定性だけをもつものか、状況ではなく、その人の内的要因に依存した通状況的

一貫性をもつものかといった視点から、そうした仮定が厳しく批判されるようになったのも事実である (渡邊・佐藤、1994a、1994b)。

性格の一貫性についての論議は、ミッシェル (Mischel, 1968) の“Personality and assessment”が公判されて以来、20年間にわたって展開された。ミッシェルは、客観的データをもとに通状況的一貫性の存在を疑問視し、性格は内的実体ではなく状況に依存し、個々の行動は環境の影響を受けると主張した。ミッシェルの状況論への批判は、「一貫性論争」(consistency controversy)「人間 - 状況論争」(person situation controversy)と呼ばれる論議を引き起こした (堀毛 1989, 1996; Krahe, 1992)。この論争がきっかけで、性格研究は新たなアプローチが導入され、性格研究に活力をもたらしたことも認めざるを得ない。そして、古くて新しい相互作用論 (interactionism) が注目されるようになったのである。相互作用論は、エンドラーとマグヌセン (Endler & Magnusson, 1976a, 1976b) によって提唱され、人間行動について内的要因と外的要因の複合的な影響を重視する立場であり、以下、4点の特質を述べている。

- ①現実の行動が個人と個人の出会う状況との関連で多次元的な相互作用と関数関係にある。
- ②個人はこの相互作用過程における意図的で能動的なエージェントとみなされる。
- ③相互作用を個人の側からみれば、感情的な要因も重要だが、行動の主たる決定因は認知的な要因である。
- ④相互作用を状況の側からみれば、状況が個人にとって、もっている心理学的な意味が重要である。

このように、一貫性論争は、性格関連行動の通状況的一貫性が少なからず否定されることになった。渡邊 (1998) は、「性格とは生体と状況との相互作用の結果として生じた経時的安定性をもつ行動パターンにつけられたラベルであり、行動に因果的に先行する実体ではない」と述べ、また「性格関連行動の一貫性は状況の関数であり、通状況的一貫性は実在しない」と結論づけ、客観的な性

格研究は性格を生みだす生体＝状況相互作用の解明を主なテーマとして発展するであろうと示唆している。

つまり、性格は内的要因と状況的要因との複雑でダイナミックな相互作用によって考えるという視座が定着しつつある。このような動向は、性格研究に新しい息吹をもたらしたと思われるが、より性格研究は複雑なものになったと言える。

しかしながら、性格の一貫性論争は、「性格の二面性」という視座を導くものであり、相互状況論もまた、スポーツ選手の性格の研究に新たな視点を与えるものではないかと考える。

4) 性格の二面性

ところでスポーツ選手の性格に関する研究で、このような視点に立ったものはほとんどないと思われる。

「性格の二面性」について、桑原 (1991a) は、TSPS を開発する過程でさまざまに論議している。いわゆる、共通した概念として、a. 二元論 (Descartes, 1637)、b. アンヴァレンス (ambivalenz- 両価性; Bleuler, 1911)、c. オモテとウラ (土居, 1976)、d. 補償 (Adler, 1917, 1926; Jung, 1921) という事柄から検討しているが、これらの概念のみでは「性格の二面性」を説明できないとしている。

また、性格理論において、a. 類型論 (Kretschmer, 1921, Jung, 1921) b. 特性論 (Allport, 1931; Catell, 1950; Guilford, 1959; Eysenck, 1947) を取り上げ検討しているが、類型論については、有効性は経験的に認められるものの、主観的で直感的であるがゆえに、統計的、数量的な方法で捉えようとしたとき、単なる“レッテル貼り”に終始してしまう危険性があると述べている。また、特性論については、様々な特性の存在を許しており、そこには、「性格の二面性」の存在の余地があるものの、積極的に取り上げたものは少ないと論じている。

しかしながら、Jung のこのころの補償性、あるいは相補性といった視点はたいへん興味深いものがある。Jung は、意識の態度に対して無意識の

態度を想定し、こころは対極的なものに支えられつつ、ダイナミックにその全体性、あるいは統合性を保っているという。

たとえば、私たちが日常的に頻繁に使用する性格を示す言葉として「あの人は外向的 (内向的) である」という表現がある。それは Jung が臨床のなかで見いだしたこころのエネルギーの流れであり、一般的態度といわれるものである。外界の対象に向かってこころのエネルギーが流れる外向タイプ、自分の内界に向かってこころのエネルギーが流れる内向タイプ、この両者が常に補償的、あるいは相補的關係にあると考えたのである。つまり、意識の態度が外向的な人は、無意識の態度は内向的であって、外向的態度が極端に強調されると、内向的態度が補償的に作用すると考えたのである。比喩的であるが「光強ければ、影もまた濃い」ということであり、相対的でどちらが優位に作用しているかということである。Jung (1921) は“言うまでもなく正常な外向的態度という場合、それはこの型の人間ならいついかなる場所においても外向的な図式に従って行動するという意味ではない。この型の人間にも内向性のメカニズムの働きによると思われるような心理現象が見られる場合は枚挙にいとまがない。お断りするまでもなく、ある態度が、外向的と呼ばれるのは、外向的メカニズムが優位を占めている場合だけである。”と述べる。(桑原, 1991a)

私たちの性格もまた、相反するもの、対極的な面を内に含むとはいえ、Jung が述べるように、普段は、どちらかの態度が優先され、他方はその影にかくれていながらも、自己コントロールし、微妙なバランスをとっていると考えられる。

つまり、その微妙なバランスに裏付けされながら、スポーツ選手もまたこころをコントロールしながら競技を行うなかで、自己を統合へと向かわせていると考えられる。

スポーツ選手は一般的には外向的であるという。しかしながら、前述したように「性格の二面性」という視点を取り入れるとき、スポーツ選手のこころは、外向性が優位であるが、一方、内向性もまたこころの影にかくれていながら、補償的、

そして相補的な作用しているのである。このような関係のなかで、スポーツ選手のころはダイナミックな動きを見てとることができる考える。

つまりこのような視点をもつとき、スポーツ選手のころを力動的に生き生きと捉えられることができるのではないだろうか。

競技スポーツの現場は、さまざまことを示唆してくれる。本研究で明らかになったように、スポーツ場面での対極にあると思われる性格の顕現化は、自己コントロールや自己統合の機会を与えると同時に、その困難性をも実感することができる。

5) 対立の融合、統合

さて、私たちは対極的なものを持ちながら、そのダイナミックなものに導かれ、どこへ行くのであろうか。私たちの身心はバランスをとりながら、ひとつの統合へ向かっているのであろうか。

スポーツ現場にいるとき、選手は対極的ものに向かい合い、不安、葛藤、時には恐怖と闘いながら、自己をコントロールし、ころのバランスを取る。そして対極的なものの融合、統合、そしてまた対立といったことを繰り返し、繰り返し行っているように考える。自他への優しさ、厳しさは、対極的であり、対立するものであるが、競技する中で、融合し、統合されつつ、身心のダイナミズムを生じさす。

競技スポーツの中で、いかなる結果を得ることができたとしても、自己が上り詰め、完結することはないだろう。たとえ、ある目標が達成されても、それは完結を意味するものではない。競技において自己が納得するパフォーマンスを達成し、満足するいい試合は、身心のコントロールと融合・統合を感じる選手は多い。しかし、多くの選手は、このような身心の融合と統合を瞬時体感するものの、次の瞬間には、また、新たな出発点に立たされるのではないだろうか。

このような論議は、弁証法的な考えにもあると桑原 (1991a) は中埜 (1973) の弁証法を引用し、討議している。中埜は、弁証法の考えの特徴を以下の5つに要約している。

①すべてのものは、それが有限である限り、必

ずそれ自身の中に、自らを否定するものを含む。

②自己に内在するこの否定性のゆえに、すべての有限なものは必ず自分のなかから他者を生みだすか、自己が他者に転化する。それによって自己と他者との間に対立が生じる。

③このように生じた対立する2つのものは互いに他の存在を前提としあい、相補性の関係にある

④この対立は必ず一致に達する。これは“必然的”に行われるのであって、はじめから正と反とが固定的に対立しており、それが突如として、何か神秘的作用によって統一されるわけではない。また、この統一は、本質的には“和解”である。何らかの仕方で両者がともに生かされるような和解的統一である。

⑤しかしこの和解的統一はけっして恒久的、究極的なものではなく、あくまで暫定的なものである。従ってその有限性のために、必然的にそのなかからそれを否定するものが生まれ、ここに新しい対立が生起する。この新しい対立はまた前と同じように統一される。このようにして、すべてのものはこのプロセスを繰り返しながら“発展”する。

苦渋の勝利を競技を楽しむことによって得ること、自己の記録を更新することは、瞬時の身心の融合と統合を意味するものと考えている。それはひとつの身心の完結性を感じさせるものであるが、私たちは、そこにとどまり、自身を硬直化するものではない。長野オリンピックで金メダルをとった清水宏保選手は、その結果も自身にとってはひとつのプロセスだと言う。今年もまた、腰痛に悩みながら世界 No.1 をめざし、Only One を手申しようと苦悩している。プロ野球のイチロー、マラソンランナーの高橋尚子等々、真摯なスポーツへの関わりを見て取るとき、あくまで彼らの競技の結果は究極的なものではなく、暫定的なものであり、ひとつのプロセスに過ぎない。

対極的なものが、新たなころのダイナミズムを生みだし、新たな目標を設定することになる。それは身心の新たなさまざま対立が生じることに

よって、自己コントロール、身心の融合、統合を絶え間なく繰り返すことになる。まさに、競技スポーツにおいて、選手はこのプロセスを繰り返しながら、自己をより深淵に、そして高める。スポーツ選手の性格の二面性についての視座は、このようなプロセスへの論議でもある。

VI. 今後の課題

本研究において、スポーツ選手の性格の二面性について、多くのスポーツ選手が普段と違う自分、「もう一人の自分」を競技スポーツの場で意識していることが明らかになった。

このことが、精神病理学的に論議される「二重人格」、「二重身」を意味するのではなく、スポーツ選手の性格の二面性は、対極的でありながらも、そこには連続性があり、矛盾する性格特性の共存を認めることができる。また、対極的な性格の表出についても、何ら不安をもつことなく、自然に認知していることである。このことは、TSPSにおいて顕著に、あるいは比較的「性格の二面性」を表出していると思われる得点群が83.9%と出現していることから伺える。つまり、「もう一人の自分」を自然な形で受け容れていることでもあり、ある意味では、ひとつのコントロールされた性格をうかがい知ることができた。

今後、TSPSにおける他の心理テストを含めた個人の分析と詳細な検討が必要である。また、今回の調査では、「二面性」の抽出をしやすいように、項目すべてを望ましい意味をもつP語を使用した。桑原が①望ましく見せようとする構えが混入する。②性格のなかの「望ましい」という一面だけを見ている、と指摘するように、望ましくない意味をもつN語を付加し検討することも必要である。

一方、実践的に見いだされる事例的な研究も、調査研究を補うものであり、大きな課題として残された。

引用・参考文献

- Adler,A. 1917 Study of Organ Inferiority and Its Psychological Compensation. New York:Nervous & Mental Diseases Publishinn Company.
- Adler,A. 1926 The Neurotic Constitution.New York:Dodd,Mead & Co.
- Allport,G.W. 1931 "What is a trait of personality?" Journal of abnormal and social psychology,25, 363-372
- 土居健郎 1976 オモテとウラの精神病理 荻野恒一(編)分裂病の精神病理 4 東京大学出版 1-20
- Endler,N.S. & Magnusson,D (Eds) 1976a Interractinal psychology and personarity.Hemisphere.
- Endler,N.S. & Magnusson,D 1976b Toward an interational psychology of personality.Psychology Bullentin,83, 956-974.
- Eysenck,H,J. 1947 Dimensions of personality. Routledege & Kegan Paul.
- Guilford,J,P. 1959 Personality.New York:McG row-Hill.pp.99-102
- 堀毛一也 1989 社会的行動とパーソナリティ 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編著) 社会心理学パースペクティブ1:個人から他者へ 誠信書房
- 堀毛一也 1996 パーソナリティ研究への新たな視座 大淵憲一・堀毛一也(編) パーソナリティと対人行動 誠信書房
- Jung,C.G. 1921 Psychologishe Typen.14.Auflage 1981 Gesammelte Werke,Bd.6.Walter-Verlag.
- 河合隼雄 1967 ユング心理学入門 倍風館
- 河合隼雄 1971 コンプレックス 岩波書店
- 河合隼雄 1983 人格論における対極性 岩波講座・精神の科学2 岩波書店 272-307
- 小林哲郎 1980 Ambiguity Tolerance 質問紙 MAT-50 について—日本での信頼性、妥当性の検討— 日本心理学会第44回発表論文集

- 501.
- Krahe, B. 1992 *Personality and social psychology: Towards a synthesis*. Sagre. 堀毛一也(編訳) 1996 社会的状況とパーソナリティ 北大路書房
- Kretschmer, E. 1921 *Körperbau und Charakter*. Springer.
- 桑原(森)知子 1983 質問紙法による性格の二面性測定の試み 心理学研究 54(3)、182-188
- 桑原知子 1985 パーソナリティ測定尺度に関する一研究—SD法との比較による、新しい測定形式の検討 心理学研究 56(2)、79-85
- 桑原知子 1986a 性格の二面性測定の試み—NEGATIVE語を加えて 教育心理学研究 34(1)、31-38
- 桑原知子 1986b 「不安」と「性格の二面性」との関係について 心理臨床学研究 3(2)、83-89
- 桑原知子 1991a 性格の二面性について 風間書房
- 桑原知子 1991b 相補性を考慮した新タイプテスト作成の試み 日本心理学会第55回大会発表 論文集
- 桑原知子 1993 TSPS “性格の二面性スケール” 上里一郎監修「心理アセスメントハンドブック」第23章 西村書店
- 桑原知子 1994 もう一人の私 創元社
- 桑原知子 1998a 性格の二面性 詫摩武俊(監修)「性格心理ハンドブック」1部3章3節 福村出版
- 桑原知子 1998b 性格の二面性について 佐藤達哉編集「現代のエスプリ」372
- Mischel, W. 1968 *Personality and assessment*. John Wiley & Sons. 詫摩武俊(監訳) 1992
パーソナリティの理論—状況主義的アプローチ 誠信書房.
- 仲埜 肇 1973 弁証法 中央公論社
- 日本スポーツ心理学会 1984 スポーツ心理学Q & A 日本スポーツ心理学会、松田岩男編 不昧堂出版
- 日本スポーツ心理学会 1998 スポーツ心理学Q & A 日本スポーツ心理学会、藤田厚編 不昧堂出版
- Tyrrell, G.N.M. 1947 *Personality of Man*, Penguin Books. H. エレンベルガー著 木村敏・中井久夫監訳『無意識の発見』弘文堂 1980より引用
- 内山田記子 1985 高校生における人格の二面性の特質 筑波大学卒業論文
- 若林明雄 1981 パーソナリティ評定尺度の形式の検討とパーソナリティの認知次元について 日本教育心理学会第23回総会発表論文集 814—815
- 若林明雄 1986 パーソナリティの類型論における分裂性気質型の検討—分離性及び自閉性について— 日本大学心理研究、第7号、1—12
- 若林明雄 1993 パーソナリティ研究における“人間—状況論争”の動向 心理学研究 64 296—312.
- 渡邊芳之・佐藤達哉 1994a パーソナリティの一貫性をめぐる視点と時間の問題 心理評論 36 226—243
- 渡邊芳之・佐藤達哉 1994b 一貫性論争における行動観察と予測の問題 性格心理学研究 2 68—81.
- 渡邊芳之 1998 性格の一貫性 詫摩武俊(監修)「性格心理ハンドブック」1部3章3節 福村出版